



故郷喪失した 現代社会の魂と安住の地

人間学研究室 客員教授 田島 忠篤
たしま ただあつ

研究の端緒

私は、廣池学園で育ち、麗澤高校、麗澤大学で学びました。そこで水野治太郎先生、細川幹夫先生の影響から宗教社会学に関心を持ち、卒業後、上智大学文学部社会学科（現・人間総合社会学科）に学士編入し、その後、大学院博士後期課程を修了しました。その間、上智大学名誉教授、故・安斎伸教授と奄美大島本島に隣接する加計呂麻島の一集落のフィールドワークを行い、そこから四十四年間、母村と出郷者の宗教文化の変容について研究をしてきました。

現在、六十世帯、百名弱の極小集落です。明治維新前は薩摩藩から黒糖を搾取され、大東亜戦争後には沖縄同様「外国」になりました。昭和二

十八年に返還されますが、基地建设により経済発展した沖縄、朝鮮戦争特需に沸く本州とは異なり、極貧状態で、島民が生きたるためには大都市圏に移住しなければなりませんでした。その結果、戦後最盛期に千名、二百世帯だった集落は、現在のような限界集落となつてしまいました。

世代を超えた愛郷心・魂の継承

こう書くと、もうこの集落は消滅寸前と思われがちです。しかし、現地にいくと、この集落だけを校区とする小学校は存続して創立百四十周年を迎えていますし、民宿二軒、食堂一軒、簡易郵便局、カトリック教会、神社と権現様、公民館、立派な墓石の並ぶ墓地もきれいに手入れされています。

出郷者に目を向けると、関東と関

西には、この集落出身者の「郷友会」（昭和三年発足の同郷出身者集団）があり、毎年、母村の豊年祭に合わせ、関東でも関西でも「お祭り」が開催されます。母村でも関東でも関西でも同じ人々の顔が見られます。上位組織として奄美大島全体の郷友会である関東奄美会、関西奄美会もあります。活動内容は、以前には「故郷の親代わり納税」「故郷のインフラ整備」、現在は「会員間の冠婚葬祭を中心にした互助活動」等があります。何が、その人たちを集落に惹きつけ、世代を超えた愛郷心が継承されるのでしょうか。

私は出郷者と母村との社会的・精神的紐帯の形成と宗教との関連について研究してきましたが、その背景には、私が育った廣池学園とこの集落が直感的に似ていると感じたからでしょう。



それは、私が出郷者に自分の姿を投影したからかもしれません。

そう言えば、東亜外事専門学校在学中に学徒出陣した父が「死んだら僕の魂は故郷ではなく学園に戻ってく」と言ったことが思い出されます。故郷喪失した現代社会の魂とその安住の地についての探究が、今後の私のテーマとなりそうです。